

慈雲

16号

2011/ 2

真宗大谷派 慈雲山 瑞蓮寺

慈雲会

〒604-8214

京都市中京区新町通蛸薬師下る

百足屋町375番地

TEL/FAX (075)221-4616

zuirenji@nifty.com

http://www.zuirenji.net/

SinsyuuOotaniha

JiunzanZuirenji

Jiunkai



時目捷連
如鷹隼飛
疾至王所
日日如是
授王八戒

【『観経』の言葉】

「時に目捷連、鷹隼の飛ぶがごとくして、疾く王の所に至る。日日に、かくのごとくして王に八戒を授く」

釈尊はビンバシヤラ王の切なる願いを聞き届けるやいなや直ちに弟子の目捷連を幽閉させている王の所へ駆けつけさせて、望みどおりに八戒を授けるのです。經典はその行動の迅速な様子を鷹や隼で譬えています。これはとても興味深い表現です。

苦悩している人の声が届いたらすぐさまそれに応える。あたりまえの事のようにですがなかなか出来ません。一瞬でも遅かったらもうその努力は無駄になります。

「あと回し」癖のある私には痛い言葉です。

・それ、秋もさり春もさりて、年月をおくるごと、昨日もすぎ今日もすぐ。いづれまにかは年老のしるらんどもおぼえず、しらすりき。しかるにそのつちには、さりとも、あるいは花鳥風月のあそびにもまじわりつらん。また歡樂苦痛の悲喜にもあいはんべりつらんなれども、いまにそれともおもいだすこととは、ひとつもなし。ただいたずらにあかし、いたずらにくらして、老のしらがとなりはてめる身のありさまこそかなしけれ。されども今日までは無常のほげしきかぜにもさそわれずして、わが身ありがおの体を、つらつら案ずるに、ただゆめのついで、まぼろしのついで。いまにおいて、生死出離の一道ならでは、ながつべきかたとはひとつもなく、またふたつもなし。これによりて、二に未来悪世のわれらごときの衆生を、たやすくたすけたまつ阿弥陀如来の本願のましますときけば、まことしたのもしく、ありがたくもおもいはんべるなり。(以下略)

『御文・四帖目第四通』
【真宗聖典 817 ページ】

今年はいくまで十年間にわたるお待ち受け期間を経て、いよいよご本山(東本願寺)において宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌が厳修されます。

また今年はいく親鸞聖人のお師匠さんである法然上人の八百回御遠忌も浄土宗で勤まり、全国からお参りされるご門徒で京都は賑やかになることと思います。

この御遠忌の法要に遇うことは私達にとつてどういふことなのか。どんな意味があるのかを少し考えてみました。

そのような時に此の事でないかと思ひ當つたのが、上にあげた蓮如上人の御文です。古語ではありますが、このままの文章の方が胸にぐつとくるものがありますのでそのままあげてみました。

*

「御文」には次のようにあります。

いつのまにか秋も去り春も去りて、昨日も過ぎ今日もまた終わつてしまつたといふような生き方をしており、その中には楽しいことや悲喜こもごものがあつた。しかし、その中で今に至つてそれこそはと

思ひだすことはひとつもない。ただいたずらに暮らして気がついてみれば老いの白髪となつてゐるこの有り様は何ともかなしいものだ。今日まで、何事もなく生きてこられたことも当たり前のようになっている我が身を考えるとそのような生き方は夢、まぼろしのようによい頼りないものである。

そのように思ふ現在においては、ふわふわした生き方でなく地に足のついた道を願ふこと以外に自分ののぞむ道はどこにもないではないか。そう思つたからこそ、このような私をも捨てることなく助けたもう阿弥陀如来の本願であると聞き及べば、何よりも頼もしくまたありがたくおもわれるのである。

蓮如上人のご述懐はまことに私たちも否と言えないところだ。しかし、そのような我が身の有り様もひとまずそのままにして、さらに自分の生や死さえも丸ごと阿弥陀さまにあずけて、ただひたすらに仏法聴聞すれば、頼もしくありがたくおもわれぬ。それを信心決定の時といひます。

【お寺を楽しむ会】

昨年十二月十八日に第二回『お寺を楽しむ会』を催しました。

暮れの押し寄せまった中、多数ご参加頂きありがとうございます。

その時の様子をお伝え致します。

第一部は本堂を使って『すごろく』を行います。

すごろくは、お寺を楽しむ会準備委員の方々が考えられたオリジナルのもので、「六角堂にこもって夢のお告げを受けて法然上人のもとへ行く」「親鸞聖人七百五十回御遠忌法要に参拝する」等のありがたい内容やインドへ旅行に行き、ガンジス河に流されて行方不明となる」



「思わぬ客があつた世から来る」等の出来れば遭遇したくないもの、「30cmの泥沼にはまる」「家で暴れて障子を破る」等の微妙なものがあり、マスの内容を読むだけで一喜一憂し、さいころを振って本堂の中をあつちへ行き、こつちへ行きと童心に返ってわいわいがやがや賑やかに過ごし楽しい時間でした。

写真は準優勝の馬場健悟君です。

第二部は恒例の各自持ちよりの宴会で色々な食べ物と、ところせましと並べられ、美味、美酒に舌鼓を打ち語らいました。

時が経つにしたがい、初めて会った方々が打ち解け合い、昔話、世間話、これからの話しに花が咲き、たわいもない話して盛り上がり楽しい一時が過ぎて行きました。

今回は山城第一組の組長 磯野淳様

(新道寺)ご一家及び山城第一組門徒会の監事 田島 彰様もお越しになり、瑞蓮寺のことだけでなく、山城第一組のこと、東本願寺のこと、京都のこと等話しながら弾み、その歴史や文化を語り合いました。



今回、お寺を楽しむ会を準備して頂きました準備委員の皆様(西澤孝実様、中川道子様、馬場麻紀様、中田大二郎様、特別参加 馬場健悟君)ありがとうございます。

この場を借りてお礼申し上げます。

第二回も企画いたしますので、決まり次第お知らせ致します。

普段、お寺の敷居が高いとお考えの方々気楽な会ですので、是非一度お越し下さい。

皆様の参加をお待ちいたしております。

瑞蓮寺寺宝什物調査から

京都儒学のライバル・闇齋と仁齋

一昨年より瑞蓮寺の寺宝調査を始め
ております。掛け軸など二百数十点があることが確認され、昨年より大谷大学の東館先生を中心に本格的な調査を行っております。一点ずつ撮影し状態寸法を確認する作業を行っておりますので、本年も引き続き調査が継続されるものと思えます。最終的には、写真解説付きの図録目録が出来ればと思えます。

瑞蓮寺の什物は、宗門（仏教）関係を中心に大変貴重な資料が多く有ります。その什物の中から京都に深く関係のある、山崎闇齋・伊藤仁齋の二人の儒

学者の書蹟を選び、今回の調査の中間報告を兼ねて、「瑞蓮寺の春のお彼岸」にご紹介したく思います。

山崎闇齋と伊藤仁齋は、江戸時代初期（寛文頃から元禄頃）に京都で大活躍した儒学者です。

両者は、同じ儒学者で有りながら全く異なった思想を持ち、江戸時代の思想、学問の基礎を築きました。

また京の町中、あの細い堀川を挟んで

互いに居を構え、町学者として、ライバルとして、京の町人として如何に生きぬいたか、儒教思想などの難しい話でなく二人の儒学者を通して江戸時代の京都の学問のお話を行います。

当日は、瑞蓮寺什物の山崎闇齋、伊藤仁齋の書蹟を展示公開致します。

藤井 聲舟

瑞蓮寺・慈雲会役員 宝物担当

【お知らせ】

三月十八日（金）午前九時より

仏具のお磨きをいたします。

三月二十一日（月祝）

春の彼岸会法要を勤修します

午後一時より納骨堂を開きます

二時 お勤め

三時 講話

藤井 聲舟氏

（山城屋文政堂主人）

四時 お齋

【編集後記】

昨年年末に「第二回 お寺を楽しむ会」を催し、あっという間に年が明け二月になりました。

本年は宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌が執り行われ、多種多様な行事が予定されております。

私は前回の御遠忌（七百回忌 昭和三十六年）には生まれておらず存じませんが、聞き及びますところ京都市中に各地から参拝に來られたご門徒方で大変な賑わいだったそうで、今回はどのような事になるか楽しみにしております。

多分、今回の御遠忌には参列出来ないだろうと、今回の御遠忌を自身に残る物にしたいと思っております。

『慈雲』を発売させて頂いたのが平成十七年の九月で、早五年を過ぎました。これからも瑞蓮寺の様子を伝えて行きますので、皆様御指導のほどよろしくお願ひ致します。

長塩浩史

瑞蓮寺のホームページができました。皆様一度ご覧下さい。

<http://www.zui-renji.net/>